
ゆき子の初恋の丘

石山ウルマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆき子の初恋の丘

【Nコード】

N82470

【作者名】

石山ウルマ。

【あらすじ】

ゆき子の初恋の丘

忘れられない出来事。

初恋はそのひとつ。

ゆき子の初恋の丘 1（前書き）

初恋がいつ始まったのか、わからない。

私の初恋を誰かに正確に語れる記憶など、本当は疑わしい。

仮に明確な記憶があつたとしても、私はあなたにしか言わない。

誰が聞いたって、これは平凡な初恋のかたち。

そして、ここに綴るのはおそらく初恋を美化した想い出。

それでも私は書き残したい。

きつと初恋は誰でも書き残したい。

ゆき子の初恋の丘 1

私とその男の子を初めて目に止めたのは小学5年生の真冬の朝だった。

新聞配達をしていた母が熱を出して配達が出来なくなったので、お姉ちゃんとお兄ちゃんと私の三人で手分けして朝刊を配ることになった。

私に手渡されたのは十五部、いつも一番少ない部数だった。

私はそれを歩いて配達する。

昼間は近所の小さな工場で働く母にはこんな事態が時々あった。

私は新聞配達の道順をすっかり覚えてしまっていた。

折り込みチラシを含んだ十五部は重たかったけれど、一軒一軒配るたびに少しずつ荷が軽くなる。それに母の手助けが出来ることが何となく嬉しくて、辛い気分になった事はなかった。

アパートの鉄の階段を上って新聞受けに差し込むのは平屋の家よりも面倒くさい。

それでも母はこの配達を毎朝やっているんだと思うと、辛い気持ちは湧かなかった。

それに、その鉄の階段を上げればゴール、私の新聞はすべて配り終わる。

202号室の新聞受けが、私の配達の終点だったから小さな満足感もあった。

そのアパートの壁の窓格子に、細い針金で軽く留めたある新聞受けがある。

強い風が吹けば落ちてしまいそうな弱い感じが嫌いだった。

止めるなら止めるで、もっと太い針金にすればいいのに。

しかも緩々（ゆるゆる）した止め方で手を抜いたような、いい加減

な止め方が気に入らなかった。

新聞を力任せに押し込めば新聞受けごと落ちてしまいそうで、落ちてしまっても私のせいじゃないと、いつもはらはらさせられる事が嫌だった。

見た感じがひ弱い新聞受けを左手で支えながら、そつと新聞を差し込んでいる時に202号室のドアが開かれて、私はその男の子と間近に顔を合わせてしまった。

誰だつてあんな静かな朝にあんなに急に、間近に顔と顔を鉢合わせしたら、思わず驚きの声を出したとしても仕方ないと思う。

「きゃっ」私のそんな声と同時に男の子は

「おっ」と目を丸くし、顔をのけぞらして、驚きの声を出した。それだつて仕方ないと思う。

一瞬、息が止まった。

別に悪い事を、こそこそとしていた訳じゃないけれど謝ってしまった。

「ごめんなさい」

「ああ？」

一声は間抜けな感じで間延びした声だったが、その男の子も気を取り直したのか謝ってくれた。

「驚いたけど、驚かしたみたいだ。ごめん」

丸顔で、男のくせに可愛い顔をしていた。それは私と同級生くらいの男の子だった。

家に帰って登校の準備をしながら、その驚いた時の話を母に話した。

「だつて、ものすごく驚いた。いきなり目の前に男の子の顔が出て来たんだよ。ねえお母さん、その子うちの学校の子じゃないよ、知らない子だった。ほら、あの鉄の階段のアパート。あそこの二階の

真ん中の部屋に住んでいるみたい」
母がその子の事を教えてくれた。
「それなら石山さん家の子だよ」

その翌朝も同じように私たちは熱の下がらない母の代わりに新聞配達に出掛けた。

昨日のその男の子の事は忘れていた。

鉄の階段の前に来た時に思い出した。そういえば昨日は驚いた、今日は昨日みたいなことはないだろう。

すると鉄の階段を上りきった時に、202号室のドアがゆっくり開いて昨日の男の子の顔が現れた。

「ああ、やっぱり」

そう言いながら、履き掛けの靴をトントンと突っかけて出てきた。

『やっぱり』と言われて、何だか勝ち誇ったように言われて面白くなかった。

私は仕方無しにお辞儀して、新聞を新聞受けには差さずにその子に手渡した。

その子に背を向けて階段を下り始めると声を掛けられた。

「きみ、小学生だろう？ バイトしているんだ、偉いね」

そんな言い方が大人じみた言い方で、無性に腹だたしかった。

あんただって子供じゃないか。

返事なんかするものかと振り向きもせず、走って、走ってアパートから遠ざかった。

家に帰ると母に聞かずには居られなかった。

「ねえお母さん、石山さん家の男の子って何年生？」

布団の中で母が

「石山さん家は男の子が二人居るけど、どっちだろうね」

「多分、小さい方」

「それなら中学一年生のはずだよ。ゆき子のお兄ちゃんと同じはずだから」

「そんなはずないと思う、私と同じくらいの子が居るはずだから」

「そんな事はないよ、石山さんは男の子が二人で、中学一年と三年の二人だよ」

「だって、小学生みたいだったよ」

「そう？でも中学一年のはずだよ」

「どうして言えるの？」

「どうしてって、その子のお母さんとは工場と同じ班だからね。お兄ちゃんが浩一くん、弟が剛」

母はその子の母親とは仲が良く、休憩時間も昼食もいつも一緒に色々な世間話をしているらしい、聞き間違いではないとはつきり言われた。

背丈は私より少し大きいけれど中学生には見えなかった。

中学生ならあんな口を利くのかな？見た感じは小学生なのに、そう思うと可笑しい気分だった。

母の熱も下がり私の新聞配達のお手伝いも二日で終わり、それつきりその子の事は忘れた。

小学六年生になつての夏休みに、同級生の照美と近所の杉山神社へ夏祭りに出掛けた。

夏休みはもちろん、夏祭りは大好きだった。

『祭り』と大書された提灯の薄灯りの列と青い法被。

幼い子供まで白塗りのお化粧をされて、小さな頭に豆絞りのねじり鉢巻。

訳のわからないお神楽と、神妙な笛や太鼓のお囃子。綿飴やハツカパイプ、玩具のくじ引きに金魚すくい。

アセチレンガスの匂いとタコ焼きの香り。

沢山の人出に歩きづらいのも、なぜか笑ってしまう。

お祭りの中の人々の、賑わいの中にいるにこやかな顔を見るのも好きだった。

どの顔も楽しそうにしている。

「お祭りは綿飴だよ」照美がはしゃいだ声で私の手を引く。照美が綿飴を買いたいと言うので付き合った。

この日に着る浴衣は、お祭りのために箆笥の中で一年を寝て暮らす。その浴衣もお姉ちゃんのお下がりで、年々小さくなってゆく。

私はとりわけ金魚すくいが好きだった。

「ねっ、次は金魚すくいだよ」

「ゆき子は下手なくせに、金魚すくいが好きだね」

「だって、下手でも必ず一匹はもらえるでしょう」

「どうせすぐに死んでしまうよ」

「えへへ、残念でした。去年の金魚はまだ生きています」

金魚って本当は何年くらい生きるのだろうか。

金魚が泳ぐ平べったくて、とても細く長い桶。

桶の底は必ずペンキの色は水色で、決まって水は生ぬるい。

その中に沢山の金魚が泳いでいる。

お金を払って金魚すくいの『ポイ』という紙の張られた道具を受け取る。

そのポイを手渡してくれたのが、あの男の子だった。見間違いかと思った。

あれから何ヶ月過ぎたのだろうか、すぐには計算できない。

丸い顔の輪郭が少し角張って来ているが、あのひ弱い郵便受けの男の子に間違いなかった。

いつの間にか金魚すくい屋の係長？それとも店長？になったのだろう

う、他のお客からお金を受け取るとポイを渡している。

私に気づいていないのなら、それでも良かった。

私はすぐに金魚すくいに集中した。

金魚すくいの極意は金魚の尾ビレの力を水に濡れた紙から外すこと、ここ狙い目なんだ。

弱った金魚は狙わない、すぐに死んでしまうから。

元気な金魚も狙わない、尾ビレ以外ですぐに紙が破れてしまうから。丁度いい金魚、弱くなく強くなく、この先何となく生きていけそうな金魚を探す。

私はどれも苦手だったけれど、金魚すくいが好きだった。

照美のポイはすぐに紙が破れて、そのくせ少しも残念そうでもなく、笑ってビニール袋に入れられた、ただ一匹の金魚を受け取っていた。

「思い出した、きみは新聞配達の子だ」

あまりにも突然で、私は俯いて返事をしなかった。

でも、思い出したのは私の方が早かった。威張るつもりは少しもないのだけれど、

私の方が早かった。

お祭りの雑踏の中で次の言葉を待っていたが、何もなかった。

本当はあの男の子の声が何かあったのかも知れない。

そしてあの日、何匹の金魚をすくったのかさえも思い出せない。

冬になって母がまた熱を出して、私は時折母に代わって新聞配達したが、

あの子に出会う偶然はなかった。

中学に進んだ四月早々に、照美が近所の公園で面白い落書きを見つけたと言ってきた。

「夢見が丘公園の壁にチョークで書かれてある落書きは毎週変わって、しかも面白いんだよ。その落書きは絵じゃなくて短文なんだけどね、それがとても面白いの。それで、私はその落書きの脇に『あなたの名前を教えて！』って書いたの。何日か過ぎて見に行ったら鉛筆描きでその人らしき自画像というのかな、似顔絵が描かれてあった。でもね、絵は下手くそみたい。ぼさぼさ頭で、どう見ても乞食みたいな顔だった」

「じゃあ、その落書きは乞食が書いたんでしょう」

「何を言っているのよ、いまだきこの辺に乞食なんて見かけないじゃない」

照美が落書きの犯人を捜し始めていたなんて知らなかった。

五月に入って間もない日曜日のお昼近く。

母に新聞購読料の受け取りを頼まれて、安東さんの家を訪れた。

安東さんの家は、夢見が丘公園へ続く長い坂の上にあった。

坂の勾配はかなり傾斜があつて、小学一年生の時に、この坂で林檎をひとつを落とした。

林檎は皮を擦り剥きながら坂を一気に転がって、ガードレールにゴンとぶつかり方向を変えてまた転がった。そしてどこかの家の庭先に飛び込んでしまった。

その庭先にはいつの間にか林檎の木が生えていて、子供ながらに『あの林檎の木は私の木だ』と思った。

今ではそんな事はないと思える。でも、その林檎の木に対する愛着は今も変わらない。

この坂道をまっすぐに上り続けると、三分とかからずに夢見が丘公園の入り口前が出る。

安東さんの家はそんな坂道に面した所に有った。

集金を済ませて帰りかけた足を、なんとなく気が向いて夢見が丘公園への坂を上った。

幼稚園の頃はこの公園が遠足先と決まっていた。こんな近所にある公園が、その頃はとても遠く感じたものだった。公園にはブランコに滑り台とシーソーがある筈、でも、そんな遊具ではもう遊ばないし、

今ではほとんどこの公園には来ない。

息を切らせて上ったこの坂道が、今ではあの頃ほど苦にならない。

一台の自転車がブレーキ音を軋ませて下ってくる。

この坂を下る自転車はどれも同じように悲鳴に近いブレーキ音を軋ませる。

安東さんの家には、そんなキーキー音がいつも響いてうるさいだろうな、と思う。

ブレーキを利かせて近づく自転車を見てはつとした。

乗っていたのはあの金魚すくいの男の子。

元をただせば、ひ弱い新聞受けの男の子だった。

そのまま通り過ぎるのかと思ったら、私の真横でその子は自転車を止めて

「こんにちは、俺のこと覚えている？」

私はとつさに首を縦に振っていた。

『うん』という意味だった。

「良かった」

男の子はそれだけを言うと、また自転車のブレーキ音を鳴らしながら坂を下っていった。

正直に首を縦に振った、でもたったそれだけの事が恥ずかしかった。自転車を振り向きもせず少し走って坂を上った。

初めてこの坂を走って上った。

走って上るにはこの坂はやはり息が切れる、すぐに走れなくなった。その時に初めて坂を振り返ったけれど、誰の姿も見えなかった。

ゆき子の初恋の丘 2

夢見が丘公園には展望台がある。

そこはこの公園で、私が一番好きな場所、私はその展望台に向かった。

その展望台からは、この小さな町の風景が良く見える。

舗装されていない菜の花畑の脇の小道と、たくさんの人が暮らす数々の屋根。

緑色や赤い屋根が、この展望台からは良く見えた。

お母さんが働くちっぽけな工場の黒い屋根。

私が通う中学校も小さい。

バスの停留場も見える、バスを待つ人も見える。

バスが停留場に向かって走っているのも見える。

お客を乗せて走り出すバス。

みんな玩具みたいに動いている。

その展望台の壁にあの子の自画像を見つけた。

さつき見たばかりのボサボサ頭。

たしかに、乞食みたいな感じだった。

その絵の、恥ずかしそうな上目遣いの視線が本当に貧乏臭い。

チヨークで何かを書いた跡があるけれど、何かの布でチヨークの文字を引きずった帯状の太い消し跡の線がある。

照美が言っていた公園の壁とはこの事だったと思った。

でも、チヨークの文字は消されていて、何が書かれてあったのかは、わからなかった。

あの子、これを消しに来たのかな、そんな風に思えた。

たしかに、絵は下手なんだろうな。

あの子はこの絵の感じとは違う、ぜんぜん似ていない。

似ているのはボサボサで尖がった髪型の頭だけ。

照美が言っていた面白い文章は読めなかったけれど、少しも残念ではなかった。

絵も特に面白くなかった。

あの子が私を覚えていて声を掛けたこと、そっちの方が私の心を和ませた。

これまでの私の記憶とあの子の記憶は、どんな方向へ進むのだろうか。

六月になって照美が言ってきた。

「とうとう見つけたよ、住所を聞いたら教えてくれた。手紙を書いたら返事も来た」

照美はその封筒だけを証拠のように自慢げに見せてくれた。

差出人は『石山剛』。

やはり、あの落書きの主があの子だった。

私はそのチョークの落書きの内容も知らないし、照美への手紙には何を書かれて有ったのかも知らない。

私はその子の存在を知っている、私は家も名前も知っていた。

『私はその子を前から知っている』と照美には言えなかった。知っている事なんて、実は何にもならない。

大好きな夏休みがまたやって来た。

夏休みに入る直前に、別のクラスの男子から好きだと告白された。

お祭りに一緒に行きたいと言われて断った。

お祭りの当日、照美と約束した場所に行くと、そこにはその男子が私を待っていた。

「照美は？」

「照美は先に神社で待っているから、俺と一緒に行くよ」

「ふざけないで」

「いいじゃんかよ」

もうこの年は浴衣も小さすぎて着られなかった。
それも良かった、私は杉山神社へと走った。

神社へたどり着いても照美を探さなかった。

腹立たしくて、華やかなお祭りの提灯の灯りを全部消して回りたかった。

『ひどい』

これは何なのか、どういふつもりなのか、腹立たしさで答えなんか見つからない。

でも私はそのまま家には帰らずにお祭りに来た。

何故あの時、私は家には帰らなかったのだろう。

大好きな母は、お祭りの夜も家に居る、真っ直ぐに帰っても良かった。

思惑なんてなかったつもりだけれど、私は金魚すくいの屋台を探した。

この夏の今夜の『ひどい』お祭りにも、あの郵便受けの子はいた。
金魚すくいの桶の前に立っている私を、この子は多分私よりも先に気づいた。

「くんばんは」

この子とは出会いから今日まで、何度目を合わせたのだろうか。

私はまた縦に『うん』と首を振った。

ゆき子の初恋の丘 3

そのまま立ち去ろうとしたら、その子は私にポイを渡してくれた。

「五匹以上すくったなら、お金は要らない。どう？」

「私、お金は払います」

「うん、わかった。四匹以下ならお金は貰う」

「それ、同じことですよ」

「きみ、頭良いね」

そう言われて、はにかんでいる自分がわかった。

それが初めての会話だった。

私はその時、五匹の金魚をすくった。

「ちょうど五匹か。約束どおり、お金は要らないよ」

「いいえ、払います」

その子にはこりと、笑みを含ませた顔でうなずいた。

お金を払いながら思い切って聞いてみた。

「これ、アルバイトなんですか？」

「そう、年に一日だけのアルバイト」

「楽しそうですね」

「うん、面白いよ。そうだ、悪いけれど十分間だけ店番して」

困惑している私にまるで気づく様子もなく、さっさとその子は

「すぐに戻ります」とお祭りの人々の中に紛れ込んでしまった。

おろおろと、たじろぐ間もなく立ち尽くす私に、小さな子供に小銭を渡された。

「ちょうだい」と差し出された手に、急いでポイを渡す。

ポイの紙が破けたらビニール袋に水を入れて、すくった金魚を入れてあげる。

お店の人になるのは初めてだけれど、見慣れた風景なので簡単に出来た。

お店側から見ると、お祭りの風景も何となく違った風景に見えた。お祭りには働く人たちが、沢山いることに気づいた。

私も今は働く側にいる、妙な気持ちになった。

そう思うと何だかまた、心細くなった。

照美や他の誰かに見られたら、なんて言えいいのかと困った。

それでもお客はお構い無しにやって来た。

『おねがい、早く帰ってきてよ』何度も心の中で呟いていると、やっと帰って来た。

あの子はハアハアと息を切らせて帰って来た。

一生懸命に走ってきたのかと思うと、不満そうな顔は見せられなかった。

「ありがとう、大変だった？」

「ううん、大丈夫。面白かった」これは嘘の部類に入るのだろうか。

「でも、何処へ行っていたのですか？」

「お母さんが夏風邪で寝ていてね、水枕の氷を替えてきた」

並んで立つと私よりもかなり大きな背丈になっていた

初めて見たときは、男のくせに可愛い顔をしていると思った。

今はたぶん高校生だし、男の子は高校性になると随分大人じみてるもんだなと思った。

それからまた数ヶ月、あの子に会うことはなかった。

家も名前も知っているけれど、ただそれだけの距離に変わりはないかった。

同じ町内に住んでいてどうして偶然に出会うことがないのか、考えると思議な気がして

二歳年上のお兄ちゃんに聞いてみた。

「お兄ちゃんの中学時代の同級生に石山剛って子いた？」

「石山？聞いたことないよ。俺の学年にはそんな名前の奴はいないよ」

中学二年の三月。

私はまた鉄の階段を上って、あの子が住むアパートの202号室に新聞を配達した。

でも、あの子と出会うことはなかった。

五月になって、十三日の水曜日だった。

私の記憶に間違いはない、それは五月十三日の水曜日だった。

あの子が突然と私の家に来た。

陽が伸びて、日没が遅くなった夕方の事だった。

玄関先で『ごめんください』との声を聞き留めて引き戸を開けたらあの子が立っていた。

驚いた。あの子が私の家にやって来るなんて、想像をした事などない。

「きみが好きです、写真を一枚ください」

あの子は、それしか言わないで立っている。

そして私の顔をただじっと見ていた。

私もその顔をじっと見た。

その子はニコツと笑顔を見せて、深々とぺこりと頭を下げて

「お願いします」元気のいい声でそう言った。

頭を上げたあの子とまた目が合った。

「驚きますよね、でも冗談でこんな事はしないです」

「本気？」私の口から出た言葉は『なぜ？』ではなかった。

本当なら、なぜ？どうして？聞くべき所だったかもしれない。本気です、と答えられて私は困ってしまった。

「いつの間にか気が付いてみたら、きみが好きになっていた。それは何年も前からだと思う。理由はない。

誰にも見せませんから写真をください。お願いします」
そう言ってまた微笑んだ。

何となくその子の気持ちが嬉しく伝わった。

私はお気に入り、一枚の写真をその子に渡した。

その日から間もなく、夢見が丘公園の展望台で初めてふたりで会った。

ふたりで展望台からこの町の風景を眺めると、この町も大きな町に思える。

剛くんは展望台の壁に私の似顔絵を鉛筆で書いてくれた。
その横に剛くんの似顔絵を私が書いた。

ふたりの顔がその壁に並んだ。
やっつと。

この物語を金ちゃんこと『琴灸菩』氏に捧ぐ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247o/>

ゆき子の初恋の丘

2010年11月12日20時20分発行